

地域の健康を支え、住民生活・企業活動・観光交流の安心を担う拠点となる「おおくまウェルネスパーク」を提案します

地域住民から期待される中核的病院の機能整備に加え、健康・福祉をより身近にする健康交流拠点

計画敷地は大野駅西交流エリアに位置します。産業交流施設、商業施設や社会教育複合施設が計画され、駅前に商店街が立ち並んでいたかつての賑わいが戻ってきました。

ふたば病院はこれら交流エリアの中で各施設と連携し医療、保健、福祉、介護の側面から安心を支え、双葉地域から病院を利用する方々が訪れることで交流エリアをさらなる賑わいゾーンへと魅力を高めることに貢献します。

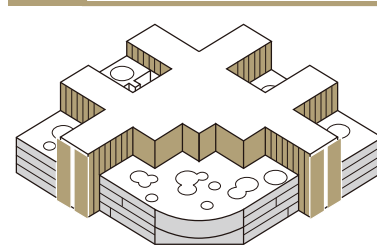
過去に双葉郡や大熊町への合併といった、新たなつながりから魅力あるまちづくりを行う土壌がある双葉地域で地域へ戻ってきた人、新たに集う人、未だ離れて暮らす人の誰もが安心でき、健康を通じた地域の交流を育みます。



安心や連携の拠点施設を象徴する外観デザイン

- 計画建物は3・4階に病棟を配置した高層部と病棟以外の機能を集約配置した低層部のボリュームで構成します。
- 高層部と低層部が機能的に融合した新病院のつながりの力強さを建物外観でも表現します。

高層部 上階に6看護病棟を集約配置



- すっきりとした縦強調
→医療施設の信頼感を表現
- 直線を用いた端正なボリューム
→変わらない芯の強さや落ち着き
- 温かみ・落ち着きのある色彩
- 伸びやかな横強調
→地域住民や周辺施設との連携を表現
- 曲線を用いた柔和なボリューム
→多様な人や活動を受け入れる
- 清潔感・安心感を表現した色彩

低層部 外来・診療・管理諸室を配置



合理的な建物配置と周辺交流エリアの一体感演出

- 建物は敷地中央の既存建物跡に計画します。解体による掘削後レベルから工事することで新たな掘削量を減らすことができ、工期短縮と工事費縮減が可能です。
- 建物東側には「いきいき健康づくりフォーラム」等の地域向け健康啓発イベントや企業健診、職員運動会などが開催でき、健康器具やリハビリ菜園がある「健康ひろば」を設けます。
- 健康ひろばに面して内外一体利用可能な大会議室を配置し、町民の健康交流の活性化を図ります。
- 大野駅から敷地東側の交流エリアを介して人の流れを計画敷地へ引き込む「コネクトルーフ」を設け、大野駅西交流エリアでの一体感を演出します。

利便性・安全性に配慮して明確に分離した動線計画

- 駅からの人の流れと南側前面道路からの視認性を確保できる南東角にメインエントランスを設けます。
- エントランス前の車寄せにかかる「コネクトルーフ」は、雨や雪を気にせず安心して乗降可能となる大きさを確保します。
- 一般車両は駅と大熊ICをつなぐ南側前面道路からアプローチさせ、出入りを一方通行とすることで安全性に配慮します。
- 患者用駐車場から近い位置にサブエントランス（時間外兼用）を設け、利用者の利便性に配慮します。
- 救急車両は一般車両等と明確に動線分離し、西側道路からアプローチさせます。大野駅東側地域から線路を超える際の幹線道路となる北側道路からのアクセスにも配慮します。
- サービス車両は一般車両と明確に分離した動線を確保します。
- サービスヤードやサービス玄関は北側に配置し、敷地の高低差を利用することで周囲からの視線を極力遮り景観に配慮します。

周辺環境と調和する建物の低層化と機能的断面構成

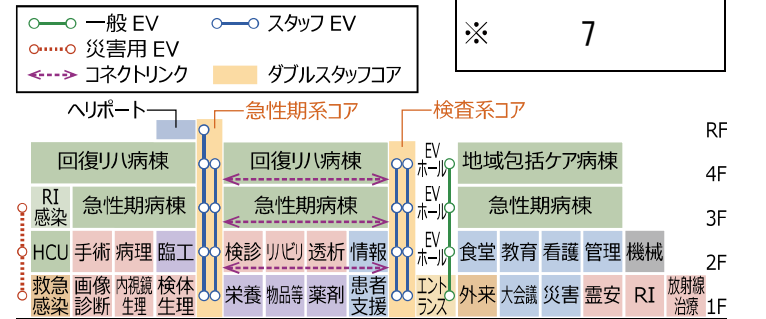
- HCUを除く全6看護単位の病棟を急性期系と回復期系の各3看護単位に分類し、ワンフロア3看護単位を配置することで病棟を2層で構成して建物全体を低層化・効率化します。
- 各病棟階では同種の病棟が揃うことで患者の転棟が水平移動のみで可能となり、患者・家族の負担を軽減できます。また、スタッフの連携が図りやすく働きやすさに配慮します。
- 建物低層部は外来系諸室を1階、診療系諸室や管理諸室を2階にまとめ、各利用者の動線に配慮した構成とします。

機能、効率、わかりやすさを最大化する部門配置

- 外来部門と検査部門を1階に集約配置し、外来患者の上下移動をなくして負担の軽減、また、検体搬送を最大限効率化するワンフロア外来を実現します。
- 救急・放射線・内視鏡の部門を近接配置し、救急患者のプライバシーに配慮しながらシームレスな救急医療に貢献します。
- HCUと手術部門を隣接させ迅速な急性期医療を実現します。
- 健診部門と各種検査部門を上下に積層し、階段やエレベーターによりプライバシーに配慮しながら最短距離で連携します。
- 独自の運用時間となる人工透析部門は2階に配置し、時間外や休日にも単独運営がしやすい計画とします。

特色を持たせたダブルスタッフコア

- スタッフ用エレベーターは、救急・手術・病棟・ヘリといった各部門をつなぐ急性期系コアと病棟・リハビリ・人工透析・各種検査諸室をつなぐ検査系コアの2つのコア=ダブルスタッフコアを配置します。
- ダブルスタッフコアは各階でスタッフ専用の廊下「コネクトリンク」で乗換可能とし、スタッフの働きやすさに配慮します。



最先端医療を提供するハード面・ソフト面の整備

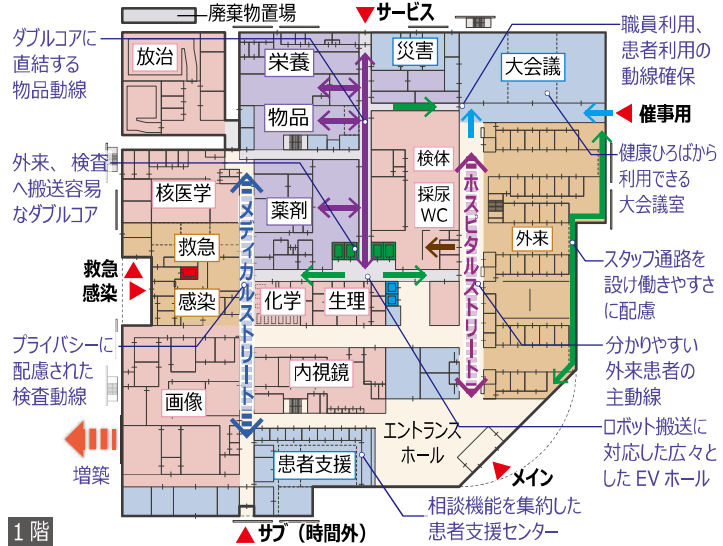
- スタッフEVに近接して供給部門及び病棟スタッフステーションを計画することで搬送ルートの合理化を徹底し、清掃や搬送ロボットの導入に備えます。
- ロボットはEV利用時の待機時間が長くなる課題が実証実験で明らかになっています。広いEVホールを計画し、ロボット待機中にも医療系搬送をスムーズに保ちます。また、ロボットが利用するEVを限定し、緊急医療用EVは専用で確保します。
- 搬送ルートとなる廊下幅の拡大・自動扉化、セキュリティシステムとの連動を検討し、ロボット動線のバリアフリー化を行います。
- デジタル技術の活用による医療の質向上、医療提供体制の効率化、患者サービスの向上を目指す県・大学病院の方針を十分に理解し、スマートホスピタル化の早期実現に向け全社会的な協力体制を構築します。



- 一般車の入口・出口を分離することで利用者の安全性や明快な動線づくりに配慮
- 歩行者や車から視認しやすく、天候に左右されない車寄せに面したメインエントランス
- 他の車両動線と分離した救急車両専用レーンを設け、迅速かつ安全な搬送を実現
- 西側用地取得時に最短かつ安全に病院へ辿りつくアプローチ
- 将来の需要拡大や新技術対応を想定し、障害物のない増築スペース確保
- 十分な作業スペースを確保したサービスヤードを一般者と交錯しない病院北側に計画
- 屋上ヘリポートに近接してEVを設け、緊急時のスムーズな動線確保に配慮
- 3Fの各居室に面して人工芝やデッキを設け、患者の屋外リハビリやスタッフのオフタイムの充実に有効活用
- 大会議室の建具を全開放することで屋内・外を一体的に利用可能
- イベントや健診といった一時的な利用者増や車両乗入に対応した「健康ひろば」
- 公共交通利用者や東側の交流エリアの人々を歩分分離された「コネクトルーフ」が迎え入れる
- 既存の調整池は歩道を整備することで、患者の屋外歩行や地域住民の憩いの場として活用を検討

2つの主動線を活かしたワンフロア外来

- ・外来診療に必要な全ての部門を1階に配置し、外来患者が上下移動せずに完結できるワンフロア外来とします。
- ・すべての外来が面するホスピタルストリートと画像、検査、内視鏡などが面するメディカルストリートで構成されたわかりやすい外来動線を構築します。
- ・予約検査のみの患者はメディカルストリートを利用することで外来を通過せずに受診が可能です。



地域の安心・安全に貢献

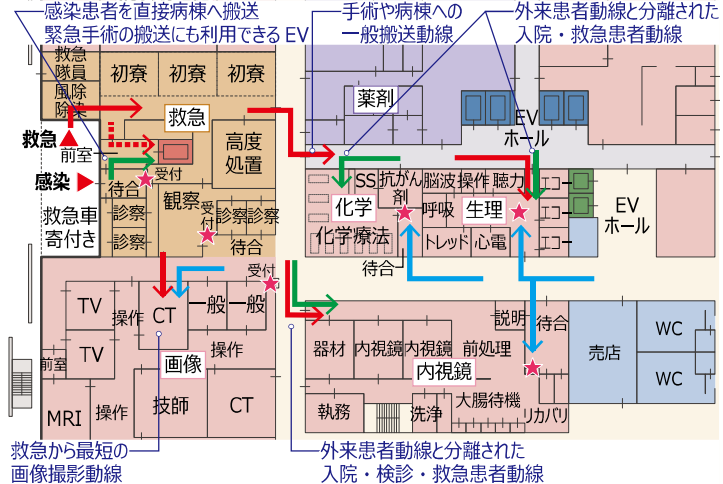
- ・健康ひろばに面して外来や大会議室を配置し、地域と健康・医療を介してつながり、双葉地域の安心・安全に貢献します。
- ・健康ひろばでの健康啓発イベントに連動して大会議室で町民講座の開催が可能です。
- ・災害時には健康ひろばに対して大会議室や外来待合を開放することで被災者の収容、軽症患者の受け入れに対応できます。

スタッフの働きやすさに配慮

- ・外来診療裏にはスタッフ通路を設け患者待合を通過せずにスタッフの移動を可能にします。
- ・採尿WCと検体検査室を隣接させ検体搬送を容易にします。
- ・栄養、物品、薬剤部門はサービス玄関からスタッフ用エレベーターまで一直線でつなぐ物品搬送動線に面して配置し、物品受入れ及び各所への払出を効率化します。

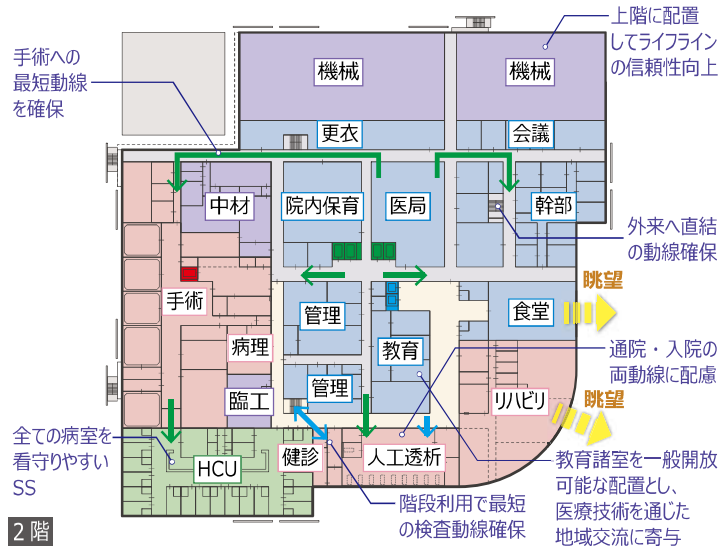
ダブルアクセスでプライバシーに配慮した診療動線

- ・画像、内視鏡、生理検査などの検査部門への外来患者動線と入院・救急患者動線を緩やかに分離したダブルアクセスを確保し、プライバシーに配慮します。



運用時間や働きやすさに配慮した部門配置

- ・人工透析部門は外来診察時間外、土曜の利用など単独運用のしやすい2階に配置します。外来からの利用だけでなく病棟からの利用動線も確保し利用者のプライバシーに配慮します。
- ・リハビリ部門は通院患者・入院患者の双方が利用しやすい2階とし、健康ひろばを見下ろす良好な環境に計画します。
- ・臨床工学部門を手術・HCU・人工透析部門に隣接させ、スタッフの働きやすさに配慮しME機器の一元管理を徹底します。

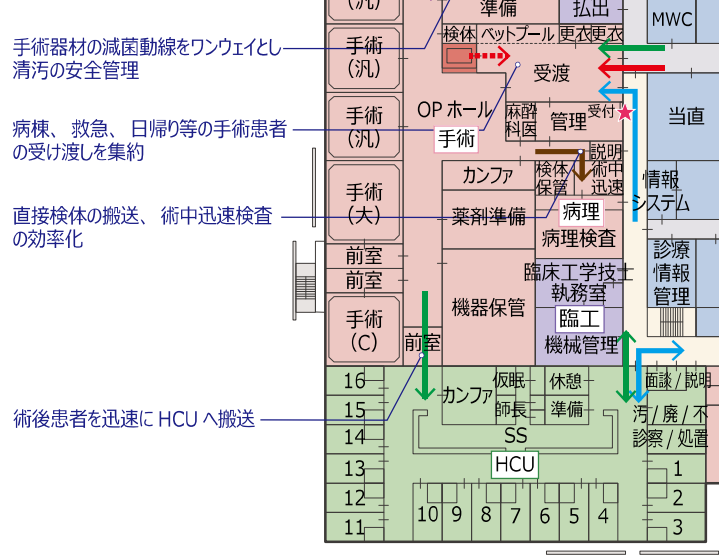


院内検査機能併用の効率的健診者動線

- ・健診は外来とは一線を画しプライベート感を重視。落ち着いた環境を提供するため2階に配置します。院内の検査部門へは近接させた階段利用により最短でプライバシーに配慮した動線を確保します。

安心・安全な周術期医療に貢献

- ・手術部門では入院患者、独歩日帰り患者、救急患者、災害時のそれぞれの動線を考慮した配置とします。
- ・術後患者を迅速かつ安全に直接HCUへ搬送できる動線を確保します。
- ・手術部門に隣接した中材部門では、器材の洗浄・滅菌・払出の動線をワンウェイとし、清污管理を徹底します。



ワンフロア3看護単位のフロア別機能ゾーニング

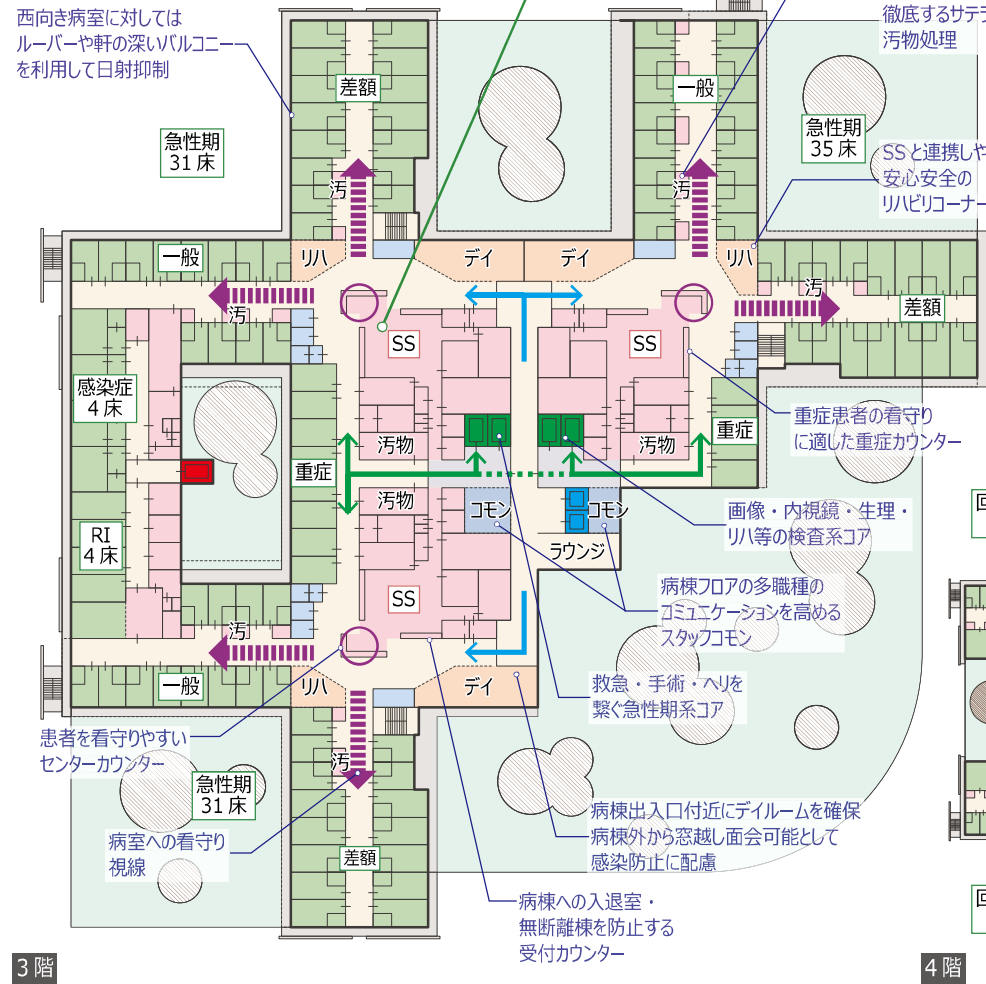
- ・HCUを除く6病棟の配置を比較し、ワンフロア3看護単位の構成がふたば病院には最適と判断します。
- ・急性期の3病棟と回復期の3病棟をフロアごとにまとめることが可能です。
- ・病棟でのエレベーター着床階を少なくでき、効率的な運用を実現できます。
- ・将来、病棟機能を転換する際に容易に切り離し可能で、残った医療系病棟の上下・水平の連携も保持できます。専用エレベーター、階段が配置されているため介護系施設への転換も可能です。

階構成	ワンフロア3看護(2層)	ワンフロア2看護(3層)
	回復期 回復期 地ケア 急性期 急性期 急性期	回復期 回復期 急性期 地ケア 急性期 急性期
病院機能連携	○(フロア内同機能)	△
エレベーター着床階	◎(最小)	○
フロア面積	△(大きい)	○
機能転換対応(点線)	○(医療連携変わらず)	△

フロア看護単位配置比較

病棟内を看守るセンターカウンター

- ・病棟廊下の交点にセンターカウンターを設けます。センターカウンターからは病室が見渡せ、ちょっとした気配も感じ取れる安全な病棟環境を提供し、患者にとって看守られる安心感のある療養環境を生み出します。
- ・センターカウンターに面して病棟リハビリコーナーを配置します。病棟の中心部でのリハビリの様子は他の患者のモチベーションを高め、万が一の急変時にはSSと連携を取ることで患者の安全なリハビリ環境を提供します。



技術提案書（様式5）

※印の欄は記入しないください

受付番号
※ 7



3 in 1の病棟構成

- ・L型病棟の折れ点にスタッフ機能を集約し、ワンフロア3看護単位の3つの病棟のスタッフ機能をそれぞれ隣接配置することでスタッフの連携が高まり、3つの病棟が1つの病棟のように運用（3 in 1）することが可能です。
- ・3つの病棟の中央部分にスタッフコモンを設けます。病棟間のスタッフのコミュニケーションを向上し、縦動線となるスタッフ用EVに隣接することで多職種間の交流も生み出します。

